

# エゾマツ



No. 47

1999. 1. 15

北海道ボランティア・レンジャー協議会

## エゾナキウサギ

毎号楽しい表紙絵を提供されている広報部スタッフの三崎篤氏に、今回「エゾナキウサギ」を描いていただきました。「エゾナキウサギ」は一見ネズミのようですが、ネズミの仲間ではなくウサギの仲間です。

卯（兎）年にちなんで、愛くるしい姿を表しています。



## 自然の探索を深め視野をより高めよう

会長 大友 健

皆様には、輝かしい希望に満ちあふれた、1999年を迎えられたことと、心よりお喜び申し上げます。

旧年の1年を、皆様には豊かな知識に基づく、自然解説実践のなかで大いに活躍くださって、当会の目的達成に寄与するところが大きく感謝を申し上げます。これら活動を通し、組織運営のご苦勞も多く有り難うございました。

新年を迎え、私共は心新たに都市近郊に存在する、「ウイーンの森」そしてパリ郊外の「フォンテンブローの森」と並び、豊かな自然が息づく「野幌原始林」が世界の三大美林であることに思いを致し、より深く四季折々の野生の息づきに微妙な表情で、メッセージを与えてくれる日々ではあるが、意欲的に自然の仕組みに探索を入れ、「森に学び」森の人間生活とのかかわりの多様性を、訪れる人々に現象をとらえ、ご理解いただくよう決意を新たにしているものである。この森が我々の主たるフィールドとして続く限り、多くの会員諸氏と探索の感性を高め、そして感動の体験を得る機会があることを期待したいのである。我々は身じかな自然を発見したり、多様性の関連づけなどして、自然保護思想の啓発に、居住地域にて活躍する使命感も大切ではないだろうか。

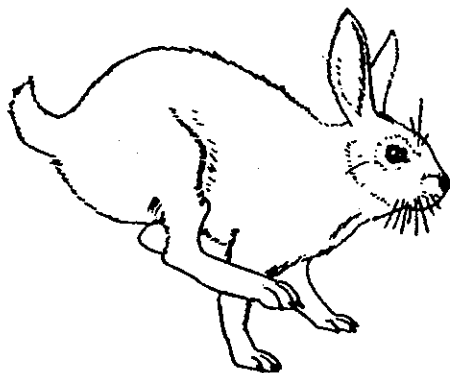
自然が、四季を我々に教えるかのように、春の息吹が木々の芽吹きであり、春の盛りは開花があり、初夏には林床植物も樹木の開葉間もなく、生活史の大半を終えようとしている。そして盛夏の森、草本層は陰性の植物で占められ、森の花暦をも作らせてくれる。このごろの夜の森では、昆虫、小動物の動きも活発なことは、生態系構成の一員として当然である。秋の魅力はなんといっても、木々の紅(黄)葉で彩られる山肌である。落葉に前後して果実や種子が飛散し、土壤動物や各種の菌に分解される落ち葉、地上小動物、鳥類の栄養摂

取の採食である。木枯らしの日々は森を沈黙の季節に変え、裸の木々がだまっ  
て立っているかのように。冬こそ、樹形のタイプや木肌などより樹種を知り、  
枝ぶりから風衝の地形関連を知り、樹幹につく地衣、鮮苔類を見分け、冬芽の  
格好を理解し、雪上に動物の足跡を追い、その種の習性を見いだしたり、樹皮  
の割れ目に潜む生物を発見したり、楽しみは探索により次から次と豊富である。

その地区、地域の会員の方々にそれぞれのフィールドをもって、自然を観察  
し、自然に親しむことこそ大切な活動であることはご承知のとおりである。  
規模は小さくても、気楽に集い、語り合い、理解ができるよう探索を続けよう。  
森林の樹木構成からも、森の遷移が伺えそれが、地史、歴史に発展し時代の人  
々と森のかかわりを知り、改めて森林環境を主にした自然保護の目線で、人々  
に語りかけることができることも喜びではないだろうか。

「森林といわず、全ての植物群落が、生物的な、あるいは物理的な諸要素の下  
に動く存在と認識すべきで、その要因はそれぞれに極めて微妙なバランスで、  
つりあっていることに注意が払われなければならない」と学者の辻井先生は述  
べておられる。

本年も、一人では見えない森を見せてあげ、森の営みにふれていただき、大  
いなる感動から環境問題など、自然の在り方などに関心をもつ仲間を増やすた  
め、人と森の間にたくさんの橋を架けわたっていただこう。



## ノストラダムスシンドローム

占星術師のノストラダムスは、長編の予言詩集を残しました。その中のセンテンスに「1999年に天から恐怖の大王がやってくる」の文言があります。

この文言がテレビ等でセンセーショナルに伝えられ話題になっています。宇宙人説、公害説、戦争説、自然異変説等を解説者が、したり顔で語る姿はこっけいに見えます。

けれども、環境ホルモン・ダイオキシン問題を引き起こし、自然をないがしろにしている人間に対し、自然が「天から恐怖の大王」を引き連れ報復するとの警告として謙虚にうけとめるべきなのかも知れません。

ノストラダムスの予言はさておき、自然環境が人為的に破壊されたり、汚されていく現状を見ると、私たちのできることは何かを考えるべきでしょう。

ボラレン活動も、観察会活動と合わせて、自然を浄化する実践活動に取り組む時期にきているのではないのでしょうか。

## 10月以降の活動

- ◎10月18日(日)・森林公園事務所主催「秋の森の観察会」 協力参加  
    鯉 野幌森林公園大沢口 (下見 10月11日)
- ◎11月15日(日)・「野幌の自然観察会」 鯉 開拓記念館前  
    (下見 11月8日)
- ◎12月3日(木)・森林公園事務所主催「12月の森の観察会」 協力参加  
    鯉 開拓記念館前
- ◎1月14日(木)・森林公園事務所主催「1月の森の観察会」 協力参加  
    鯉 開拓記念館前
- ◎1月15日(金)・広報誌「エゾマツ」47号発行
- ◎1月22日(金)・役員会(予定)

事務局 事務局への問い合わせについては、下記へお願いします。

〒061-2284 札幌市南区藤野4条7丁目277-74 佐藤 健一 宅 TEL・FAX 011-592-4222

# 会員の声

熊本市 浦田 和己

早いもので北海道をはなれて10年の歳月が流れてしまいました。その間、皆様の活躍を「エゾマツ」の紙面で拝見しています。

今、私が思うことは第一にリーダーは活動中は空気のような存在でありたい。第二は、大自然が主役で、私たちがそこにお邪魔しているんだという気持ちで活動することだと思います。

今後、エゾマツ会の皆様と私たちの協会で、人的交流ができればいいですね。私も微力ながら大自然を師として感動ある活動を続けて行きたいと思います。事務局の皆様いつもありがとうございます。今後ともよろしく。

上砂川町 本間 重吉

〔雑感〕

私は暇があると野山を歩いておりますが、草花は80種、樹木は30種しか知りません。今年は「砂川子供の国石山」に登り自然観察をして、255種の植物の名が付いており、全部をマスターしたいと思っております。

樹木には、人間を落ち着かせる作用があると言われておりますが、その通りと実感させられます。静かな森の中を自分のペースで歩きますと、今日は樹木を5種は覚えて帰ろうという思いに駆られます。そして、自然の良さと落ち着きでその場で大きな深呼吸をして、いつかは覚えられると寛大な気持ちになり、健康を維持してくれる自然に感謝し帰路につくのです。

[ホームページ見ましたか]

札幌市厚別区 樋口 達郎

本誌46号でホームページの概要をお知らせしましたが、ご覧になったでしょうか。構想は以前から持っていたのですが、四季折々の写真を使用するのでデジタルカメラでの撮影や、パソコンでの画像処理などで約1年間を要してしまいました。

今は未完成部分の制作準備をしています。なにしろ、素人のやることですから、労多く実り足らずです。

ぜひ感想や助言をお寄せ下さい。参考にさせていただきたく思います。

札幌市西区 長岡 範子

会員の皆さん、今年もよろしくお願いたします。今回は函館から、黒ガンのご案内をしました。去年の夏に札幌へ転居いたしました。

一番近いフィールドは三角山です。しかし、残念なことに、私はまだ一度も三角山へ行っていません。ちょっと体を悪くして2年程、山はお休みです。で、今年の目標は春になったら三角山にいこう!!です。ボラレンの観察会参加も楽しみにしています。

函館に6年居て、すっかり大雪を忘れてしまいました。吹雪の日は冬眠しています。

札幌市白石区 香島 由美子

青サギのコロニーが消滅したとか、種々な情報が飛びかっていますが、侵入小動物が、卵を襲い野幌森林公園も変化しているようです。

我庭にも始めてヒヨドリが巣で子育てしていることに気がきました。ところが、近所に救急車が停まって、親鳥が狂おしく鳴いていると思っていましたら、後日雛が落ちて死んでいました。こんな所で子育て出来ないと放棄した様で悲しくなりました。樹が枯れると気持ちが沈んでしまいますし、人々は自然と密着して暮らしていると思った所でした。



山納めは12月22日。穏やかな陽気に誘われ藻岩山に登ってみる。師走だというのに、たくさんの登山者に会う。葉が落ちつくした山肌は明るく、遠くまで見渡せるのが嬉しい。変わった鳴き声に珍鳥？とばかり双眼鏡を覗くと、ゴジュウカラ。ヒヨドリにも惑わされる。カツラの木ではマヒワの群れが忙しく、ハギマシコはハリギリの実に群れている。

春ここでミドリニリンソウ、初夏この沢筋でキビタキを見つけて、シラネアオイはあの辺りなどと思い出しながら汗もかかず山頂着。都心ビル群を俯瞰しながらカツカレーの昼食。安価でボリュームたっぷりの山頂レストランは私のおすすめです。

下山は簡易アイゼンをしっかり着装し、長女の帰宅に間に合うように急ぐのにアケラやキバシリ、シマエナガやミヤマカケスまで姿を見せてくれる。

1月6日に三角山に登ってから今回の藻岩で88回目のフィールドも無事終わる。新しい年は、さて、何回出かけられるのでしょうか。

ボラレンの皆様、今年もどうぞ宜しくお願い致します。



# キーワード



## 兎（卯）

今年の干支は「卯」すなわち「兎」です。会員の皆様の中にも卯年にちなんだ年男・年女の方がいられることでしょう。「卯」という字は「双葉」の象形文字といわれ、春になると地上に芽を出す双葉の事とされています。新しい芽であるため、しっかり両手で支えてやることによって力強く育っていくとの意味です。

さて、兎は哺乳類のウサギ目に属する動物であり、門歯が2重（重歯）になっているため、1重（単歯）のげっ歯目とは区別されます。

ウサギ目は、オーストラリアとマダガスカル島を除く全世界に広く分布しているときられていましたが、オーストラリアは19世紀のはじめ輸入したイエウサギが野生化して生息し、農作物に被害を与えているとされています。

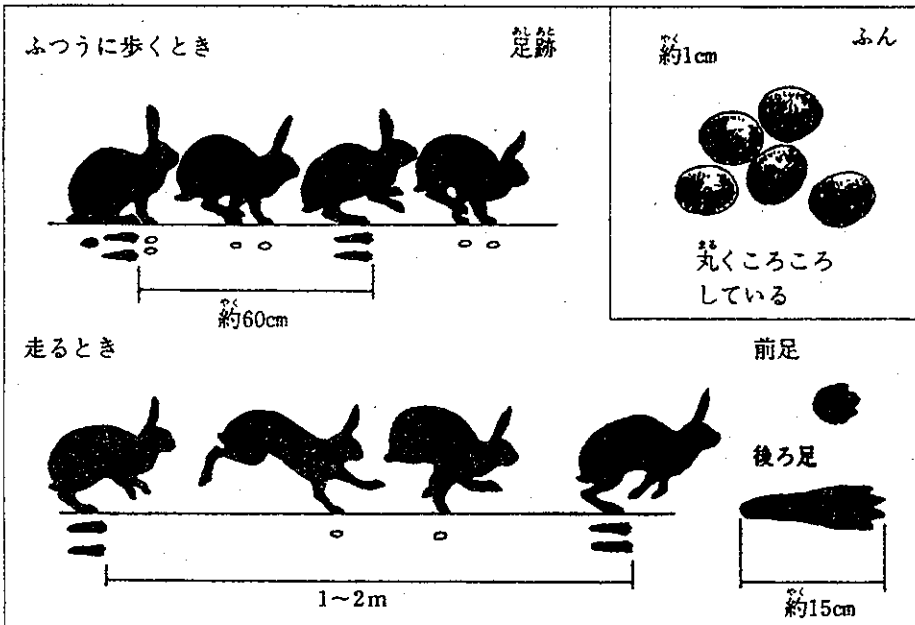
ウサギ目はウサギ科とナキウサギ科に分けられていますし、ウサギ科はノウサギ属とアナウサギ属に分けられます。ノウサギ属とアナウサギ属は交雑しても、人工受精をしても雑種をつくることのできないほど血縁の遠いものです。よくノウサギを飼いならしたものがイエウサギであると考えがちですが、それは誤りで、イエウサギの祖先は地中海沿岸に住んでいたアナウサギなのです。

ノウサギとアナウサギ(イエウサギ)との比較

	ノウサギ	アナウサギ(イエウサギ)
生態	岩穴、木の穴、草むらなどに巣をつくり、朝夕活動するものが多く、群居しないが単独行動をとる	横穴をほり、その中に巣をつくり、昼間は眠っていて夜間に活動し、群居生活をする
毛の色	季節によって毛の色が変化する種類のものが多い	毛の色は季節によって変化しない
繁殖	春秋に繁殖し、3～4匹の子を産む	繁殖期が季節に限定されず、5～6匹の子を産む
出生のときの状態	目を開いており、全身毛におおわれている	目を閉じており、全身裸体である
染色体数	2n=48	2n=44

ナキウサギは1科1属で、仲間には地球上に18～25種いると言われています。1科1属の通り形態が似てよくまとまったグループです。北海道に住むエゾナキウサギは耳介が丸く短く、尾のないネズミのようですが、ネズミの仲間ではなくウサギの仲間です。ウサギの仲間である証拠は、上あごの切

歯（門歯）が2対あって、前後に並ぶことです。エゾナキウサギという名は標準的な和名ですが、学名は *Ochotona hyperborea yesoensis* といいます。



話し変わって、諺辞典の「兎」の項を開くと、たくさんの諺があります。

- 兎兵法……本当の兵法を知らないで、へたな策略をめぐるすこと。
- 兎耳……人の隠し事を巧みに引き出すこと。
- 兎の糞……ウサギの糞のように、物事がとぎれ続かないこと。
- 兎の角……実際にはないものをあるとすること。実際にはないことのとたとえ。
- 兎の祭文……馬の耳に念仏と同じ意味。
- 兎の登り坂……持ち前の力を振るうことができ、物事が早く進むこと。

兎にまつわる諺はまだまだ沢山ありますが、あまりよい例えはないようですので、これらの諺は自戒訓としていきましょう。

#### 参考書

- 世界大百科辞典 3巻 平凡社
- 動物と私たち—北海道自然保護読本— 北海道自然保護協会
- 冬の野外観察 滝野青少年山の家

## 温故知新

札幌市厚別区 佐々木 幸 夫

北海道ボランティア・レンジャー協議会会員になって

早いもので研修会は上川支庁旭岳温泉えぞ松荘を会場に、受講したのが平成元年だから、11年を数える。その間、自然観察にかかわるノウハウを自分なりに学ぶことができた。振り返ってみると正しく走馬燈の如しの感である。

これからの10年という、自分の現在の年齢や環境などを考え合わせ長く思う。いずれにしても足腰が丈夫である限り、野外でのボランティア活動をしたいが、この11年の間に同じ研修会に参加した会員や、先輩・後輩で他界された方々を想う時、冥福をお祈りし生きている自分に会員としての責任を覚えずにはおられない。

### 温故知新

齢をとると過去のことを話したがる。さて、前段に想いを込めて新年は改めて初心にかえり「温故知新」の思想で行動をとっていきたいと自らに言い聞かせている。広辞苑を見ると〔論後為政「温、故而知、新、可、為、師矣」〕

(古い事柄も新しい物事もよく知っていて初めて人の師となるにふさわしい意)

昔の物事を研究し吟味して、そこから新しい知識や見識を得ること。古きをたずねて新しきを知る、と解説しているが、いずれにしても1998年だけを顧りみても、自分にとって記憶すべきことがあった。

### 1998年を振り返って

主なものをあげると、その1は協議会の役員を辞したこと。あらためて在任中の会員各位のご協力に感謝すると共に、今後は一会員としてその責を全うしたいし、協議会のさらなる発展を希望している。その2は4月に支笏洞爺国立公園支笏地区パークボランティア養成研修会に参加し、パークボランティアとして活動したこ

と。内容は支笏湖周辺、樽前山、風不死岳、紋別岳、オコタンペ湖、キムンモラップの野鳥の森などのクリーンを主体に、自然観察会、自然解説、学習会などを行った。この仲間には協議会の会員や会員であった人達がおられ、力強い思いをしている。その3は9月下旬から10月上旬にかけて環境庁主催の「自然解説指導員研修会」に参加できたこと。過去10数年ボランティア活動の一環として、自然観察会の案内に携わってきたが、全国レベルでのこの種の教育内容を常々知りたいと思っていたが、幸運にも山梨県清里高原で体験することが出来た。終了後の感想を問われ「大変勉強になりました」と答えたが、同所で購入した図書を読むと、感想の代表的な答えが二つあり、ひとつは「良い勉強になりました」。もうひとつは「本当に楽しかった」で、前者の感想を聞いたときにはちょっとガッカリし、後者の感想を聞いたときにはホッとする。中略、概して「勉強になった」という感想は、主催者や指導者への社交辞令であることが多い。(注1)とあったから、私の言葉も外交辞令として、彼らは受け止めたのであろうか。

その4に協議会の依頼で、某幼稚園の先生方に園児と父母を対象とした「フィールドでの楽しみかた」と、オートキャンプ場に関連した協会主催の研修会で「北海道の自然と自然観察のしかた」について話す機会があったこと。

その5に、狩場山(1520m)、羊蹄山(1893m)の頂を極め、新たな感動を得たこと。その6に「読み聞かせ」ボランティアを20名足らずの仲間と始めたこと。

それに4月から、20数年ばかり住んでいた札幌市白石区から、現住所に移ったこと。

## 1999年は

さて「故きをもって新しきを知る」は、自分の齢67年の拙い体験を通し、より生き甲斐のある生活をすることに精進したいと思っているが、あくまでも自然体で、自から楽しむように、変な「指導」などという魂胆を持つべきでないと、自分に戒めてその姿勢を新年も踏襲していきたい。

勿論自然観察の案内も、自分自身が参加者と同じ目線で、視覚・聴覚・臭覚・味覚・触覚の五感を働かせながら楽しむことがボランティア活動の継続につながる大

きな要素だろう。仏教ではこれに、意=意識という感覚を加えて六根と言うそうだが、(注2) 日々新らたな気持ちで生きることには喜びを感じている。幸い齢80を超えても、私より新鮮な生き方をしておられるK氏に深く尊敬の念を抱き、その生き方の何万分の一でも学ぶことが出来たらと念じているが、ともあれ会員各位との情報交換を緊密にして、もっと全道を足で見たいものだ。

野幌の森も、アオサギの営巣放棄やアライグマの増殖、人の写真撮影や山菜採りで変化しつつある。それにしても公園内の高等植物出現種数は733種を数え、うち68種が帰化植物と生物構成に変化が見られるが、(注3) これに登載されていない植物に、過去に国立林業試験場があった名残の見本林樹種や森林公園としての植栽樹種を加えると、優に800種を超える種数は、大都市近郊森林としてオーストリアのウィーンの森、フランスのパリ郊外にあるフォンテンブローの森に並ぶ要素を持つ。(注4)

この森で、自然観察会に拘らないで学びませんか。ご一緒させていただきますので、情報交換の一環としてご一報を乞う。

なお、注3について手持ちとして余冊があるので、必要であれば連絡願いたい。

(1998. 12. 21記)

- 注 1. 森林・林業教育実践ガイド (社) 全国林業改良普及協会  
2. 右脳人間学 藤井康男  
3. 野幌森林公園地域における高等植物出現種について 村野紀雄  
4. 北海道石狩国野幌森林の植物学的研究 館脇 操・五十嵐恒夫  
5. 佐々木幸夫の現住所と電話番号  
〒004-0004 札幌市厚別区厚別東4条8丁目4-20  
電話(011) 898-8177

## 庚申草 (コウシンソウ) を尋ねる旅

札幌市西区 川 端 功 治

「これよりバスはコウシン山を目指して中山峠の手前、薄別付近の林道に参ります。そこから徒歩で登りますが、この付近を測量された地理院の方がコウシンソウを見たという言い伝えがあり、この地方では、コウシン山と呼び、今日この山に登るわけです。ところでこの山でコウシンソウなるものを見た人はいまだかつて一人も居りません。今日も残念ながら見る事が不可能であることを、現地を見ればご理解戴けると思います。」

一瞬戸惑ったが、車中の人々は悟りきったような穏やかさであるのを訝って、隣席の方に「これは一体どういうことか」と聞いたが、「現地へ行けば判りますよ」と答えて屈託がない。どうやらこのツアーの体験者が多く、情報が行き届いていて私独りが蚊帳の外と言った感じで、これこそ狐に誑かされたような感じである。

この森林センターの観察ツアーは大変人気が高く、毎回申し込んでもなかなか当選が難しく、私のように一発当選は珍しいそうである。とにかく引き続き行われる豊平峡ダム付近の景勝地巡りに話題が集中して賑やかな車中で、私独りが慥然として配られたプリントや、持参した資料をめくっていた。

コウシンソウはタヌキモ科に属し、葉の腺毛で虫を捕らえる食虫植物で、ムシトリスミレに似て、淡紫の花を付けるが、花茎が時には分岐し、二つの花を付けるので、1茎1花のムシトリスミレとは区別が容易であるとのこと。

栃木県の足尾に断崖絶壁の山があって、仏家では青面金剛（しょうめんこんごう）又は帝釈天（たいしゃくてん）、神道家では猿田彦の神を徹夜で御祭りを、庚申の日（干支の57番目の日、かのえさる）に行う。

この日に眠ってしまうと、そのすきに三尸（さんし…人の体内に住んでいる3匹の虫…上尸、中尸、下尸）が体内から抜け出して、天帝にその人の悪事を告げるといい、またその人の命を短くするとも伝えられている。

村人や縁者が集まり、夜明けまで眠らないで対話を続けることから、社交の場に

分け道を登る。なぜザイルでも張って探求しないのだろうか。誰もいなく疑問であるが、それはどちらに転んでも、そんなにビックリするような事でもない、とたかをくくられているのかも。もしかして、誤認であったとすれば徒労と言うことにもなりかねない。

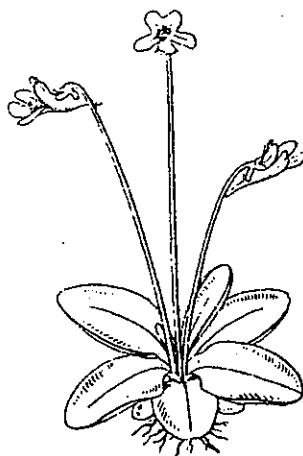
ツアー参加者の期待する自然観察の場所、豊平峡のダム定山湖巡りがスタートして一同自然の雄大さとその美しさに酔い、賛嘆の声をあげ、楽しげにはしゃいでいた。そして私は黙々と一行のあとに従った。もしかしてカラフトムシトリスミレであれば、コウシンソウとは、そっくりさんで区別がつけにくいと、ものの本（日本の野生植物）にもあるので、どなたか蛮勇を振るって探求してくれないものか、とブツブツ独り言を言いながら一行のあとを追った。

〔たぬきも科〕

こうしんそう



むしとりすみれ



参考

牧野植物図鑑 松村大辞林 日本の野生植物（平凡社）



## 街路樹「プラタナス」

札幌市厚別区 小 淵 修 子

晩秋の風の中を歩いていて、突然に方をたたかれて、ドキッとしながら振り返れば、地に低くプラタナスの葉がまさに着地するところであった。葉に肩を打たれるなんて、ボヤッとしている私への喝なのか。

また、時には風に乗れ、前方から水平にバッサバッサと大きな葉が向かって来て身をたじろかせることもある。とにかく、プラタナスは落葉になっても勢いがある。今冬は雪が早く来て、まだ枝に葉を残している木もあり、時折雪の上に落ち、紋様を描いているのは例年にない風情である。

昨年7月、オーストラリアのアデライド市に旅して、メインストリートにプラタナスの街路樹を見た時、札幌を思い出したり、札幌に居るような安心感を覚え、果実を下げた大樹をしばし見上げていた。

今年はフランスで車窓からは糸杉が目立って印象的でしたが、モンペリエという街で、一週間身ごとなプラタナスの並木道を毎日歩いた。

横には公園が広がり、今を盛りにエンジュの花が咲いていて引きつけられ、近づいて見ると標記に *Sophora Japonica* と記されていて、よけいに日本を思い出していた。

プラタナスは、他国でよく見られる来だと感じていたから、世界的な街路樹種であるとのこと、だから、どこで出会ってもあたりまえなのである。この来が札幌に植えられたのは明治の末という。街路樹として、ナナカマド、イチョウと共に札幌に馴染みの来となっている。

東南欧・西アジア原産のスズカケノキと北米原産のアメリカスズカケノキ、そして、大部分はスズカケノキとアメリカスズカケノキの雑種のモミジバスズカケノキ（カエデバスズカケノキ）など、もう交り合って、葉・形・果実・幹肌にバラエティーがあり、種類の特定ができないものも多いという。まさに国際的な来である。

私が他国のプラタナスを見て、札幌を思い出したように、外国の方も札幌のプラ

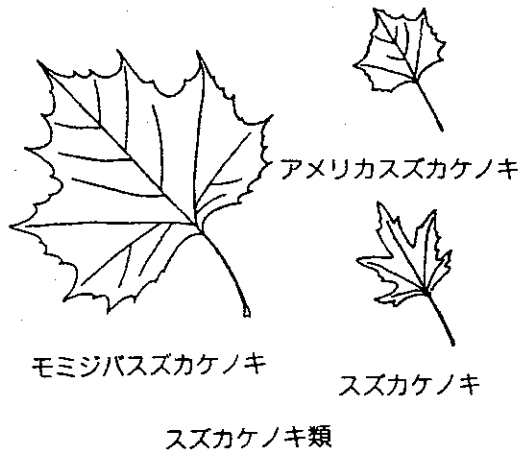
タナスを見て、望郷の念をかき立てられているのではないだろうか。

世界の4大樹に入るといふプラタナス、しかし、札幌の場合は道路上の建築基準法の適用により制限され、小じんまりと整えられている。排気ガスに耐え、剪定にも耐えて、げんこつを振り上げたような樹形に同情の声も多い。

また、樹皮の剥がれ落ちによるまだら模様の木肌も特徴的である。以前に友人からクイズで「木が脱皮していました。この木はなんでしょう？」と樹皮が送られて来たことがある。この木の脱皮？の意図はなんであろうか？。今、雪の中に白と灰色で迷彩色に変身して立っている。

四季折々に表情豊かなプラタナスは市民にも世界の人々にも愛されている樹木である。花言葉は「天才」であるとか。本当に活力を与えてくれる木である。

札幌のプラタナスが勢いよく元気であるようにと願っている。



プラタナスの語源は、「幅が広い」が転じて「葉が大きい」という意のギリシャ語であります。また、スズカケの名は鈴を懸けたような実の様子からつけられたといひます。

世界の4大並木樹種は、ニレ、ボダイジュ、トチノキ、プラタナスであり、日本の高木ではイチョウ、サクラ類、ケヤキ、トウカエデ、プラタナス類であると言われていひます。

〔おもしろい木の話（北海道林業改良普及協会）より〕

## エンレイソウの話

札幌市北区 稲葉 孝徳

私の住まいは、北大に近く、よく犬の散歩に北大構内の小路を通います。ここは、エルムの森と呼ばれたように、立派なハルニレが永い時を刻みます。また、四季を通じ、いろいろな樹木や草花、そして鳥やキツネ（牛や馬、ひつじもいる）なども見る事ができます。

思いうかべて下さい。その昔、このあたりは、豊平川扇状地の末端に位置し、メムがあちこちにあったところの一つです。そのメムをいろいろな木々がとり囲んでいます。その清流がやがて、サクシュコトニ川になり、この川には秋になると、サケがそ上してきたと言われていています。

この場所は、今でも遺跡保存地として現存します。すばらしい事だと思いませんか。きっとハルニレがこの歴史を見守ってきた生き証人といったところですよ。今では明るい林ですが、私の子供の頃は、日中でももうす暗い林でよくターザンロープ遊びをしていました。

その林床に春になれば、一斉に色とりどりの花が咲きます。中でも、オオバナノエンレイソウは、私の好きな花の一つですが、その白い花ゆえ目立つ存在です。

（かなり少なくなりました） そのわきの水たまりには、マガモのつがいが泳いでいます。おもしろいとりあわせです。皆さんも一度モデルバーンやこの遺跡保存地を訪れてみて下さい。

さて話しは変わりますが、エンレイソウの事で、おもしろいものを見つけた話しをしましょう。

いつも雪どけの時期になると、エンレイソウの仲間、特にオオバナノエンレイソウの開花期にあわせ、限られた時間の中で、道内各地を見て歩きます。その中で、様似の観音山公園には、ピンク色の花を咲かせるエンレイソウの仲間があります。

図鑑によるとヒダカエンレイソウとあります。エンレイソウとミヤマエンレイソウ

ウとの雑種との事。実物と図鑑の写真を見比べると、ちがいがわかります。ここは日高の様似だから、ヒダカエンレイソウと結論をだすのは早計です。どう見ても、オオバナノエンレイソウとエンレイソウとの子供にしか見えません。

野幌の森でいつも見かける、オオバナノエンレイソウよりも全体的にひとまわり大きく、花の色がきれいなピンクなのです。あれこれ、写真や資料を集めていたおり、本会のエゾマツに、小林文男氏の「ほんものの味」にエンレイソウについての記述を読み、何となくではあるが、調べる方向を見いだした。と同時に「鮫島先生と花の旅」に参加していれば、とくやしがる。

それから数日後にやっと、鮫島惇一郎著「北の森の植物たち」を読み、目からうろこが落ちる思いをした。詳しく、また、わかりやすく書かれています。私も詳しく、何度も何度も読み返した。そして、自分なりに一応の答えらしきものを見いだした。

図鑑にトカチエンレイソウの写真も、記述もないので、「北の森の植物たち」より重要と思われる文章を引用させていただく。『トカチエンレイソウは、体細胞で15本の染色体を持つ。つまりオオバナノエンレイソウが持つ染色体の半分と、エンレイソウの半分とが合一して15本となる3倍体であった。この雑種が見つかる率は非常に小さい。』と書かれている。

オオバナノエンレイソウについて言えるのは、これらは今なお、道南群、道北群道北群が、たがいに交雑が行われている。とするならば、ひょんな事で、これらのオオバナノエンレイソウとエンレイソウが交わり、染色体15本である3倍体のトカチエンレイソウが生れ、3倍体の倍化、つまり染色体30本の6倍体ができたとしても不思議ではない。今なお、進化の道をたどりつづけている最中なのです。

このような推察をした理由として、あまりにもピンク色の固体数が異常にありすぎる事です。多分、一代限りの寿命であれば、突然変異がおきたとしても、本当に少数であるはずだからです。鮫島先生に染色体を調べてもらえれば、一目瞭然、白黒つきます。あなたはどう思いますか？。ついでに名前をつけておきましょう。

観音山公園という場所は、沢山の観音様もおりますし、アイヌの石碑もあり、とても大切な山の印象があります。トカチエンレイソウの6倍体と呼ぶよりも、特別

に、サマニエンレイソウという名前をつけましょう。どうです、サマになっているでしょう。スライドを見てビックリです。日付は、96' 6. 9. エンレイソウの基数は3（ラテン語でトリリウム）である。何と偶然3がらみです。

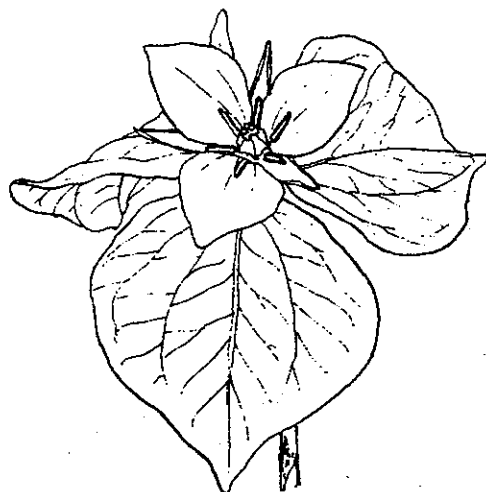
参考にさせていただいた本

- ・北海道森と林 鮫島惇一郎ほか
- ・北の森の植物たち 鮫島惇一郎
- ・北海道の花（図鑑）
- ・エゾマツ「ほんものの味」 小林文男

#### 追記

家の近くに重要文化財のモデルバーンもありますし、獣医学部もあります。遺跡保存地はすこしはなれたところにあります。

雪の観察に雪の結晶や雪の地層（断面）を見たりするのはどうでしょう。家のうらに北大低温科学研究所の実験場があります。



オオバナノエンレイソウ

森林生態系と共に生きるために

## 野幌の森ありがとう観察会をはじめよう

札幌市厚別区 樋口達郎 大槻日出男

### はじめに

1960年代アメリカの公民権運動の中で、故キング博士は「私には夢がある…」と人類の倫理的平等を説き、この運動の中で拡大した人と人とのやさしい関係は、少しずつ自然界に浸透し、高山植物やクジラ、ラッコなどの個別の生物種の保護運動から、さらにサンゴ礁や湿原、森林などの生態系と人々の生活を調和させる取り組みが地球規模で展開されています。

多くの人々が大切にしている対象が、自分たちの身近なものから地域へ、そして地球へと拡大しました。美しいもの、かわいい生き物を保護する視点から、生態系全体を人間自身を含めて、この地球と共に生きる仲間とする倫理的平等の概念が拡大したものです。

1960年代生産と効率を第一に考えたこの国で、大都市に隣接する平地の森林公園である野幌森林公園が奇跡の旅立ちをしました。200万人を超える人々が生活する平野部にある森林・年間数10万人が訪れる平地自然林の保護というテーマをかかえた森林公園のスタートです。

この30年、森林を訪れる人々は、野鳥や野の花を愛で、スキーやマラソンの運動を通して、森から喜びと癒しを与えられています。

石狩の野に生活する200万人の人々と2000ヘクタールの森林生態系の共存、この視座から考えてみますと、30年間タバコの灰皿が放置されているように、私たちの行動や考え方は取り残されているのではないのでしょうか。私たちは森林から喜びや癒しを与えられますが、森林生態系は私たちからゴミと踏跡が残されるだけな

のです。

私たちがこれからも野幌も森と共に生きていくために、小さなゴミを拾うことから始めてみませんか。ささやかな実践を通して森林生態系の良き隣人としての振舞いを考える。そのような自然観察会を実施してみませんか。「野幌の森ありがとう観察会」の提案です。

### 1. 「ゴミ拾い」からはじめて野幌の森の

「良き隣人」へ

自然と人間の活動の接点が問題になるとき、自然保護を声高に叫びながら解決していく方法もありますが、他方ひとつのゴミを拾うというささやかな行動から森林生態系と共に生きる私たちの振舞いを学ぶこともひとつの解決方法だと考えるのです。

200万人を超える人々が生活する道央の平野にある野幌の森と共に生きる—これが私たちの主題です。

1998年、私たち二人（樋口・大槻）が確認した野幌の森のゴミは各観察路のタバコの吸殻やガム、アメの包み紙はどこでも散見します。弁当の空き箱や空き缶などは登別附近に多く、樞山口では建築廃材が数回にわたり、トラックで運び込まれています。また、積雪期を除き自動車の通路となっている基線に沿って、ホイールカバーをはじめ多数の空き缶、中には大きなスピーカーボックスまで捨てられています。

このゴミを誰が片付けるのでしょうか。「森林の管理者（行政）が片付けるのがあたりまえ…」これが今までの考え方ですが、はたして最

善の方法だったでしょうか？。

この30年間に都市でのゴミ処理のシステムも変化しています。ドイツ等での事例では、市民の分別活動・ゴミを少なくするという活動が、焼却するゴミの量を100分の1にまで減らしています。

そこには問題点をしっかりと市民に市民に知らせる行政の姿勢と、解決の方法への市民の参加と、そして市民も責任ある行動をする。そのような都市社会の成立があるからすばらしい成果が生まれたのでしょう。

私たち都市生活者が森林生態系との共存を模索するひとつの手掛かりを求めて、具体的な行動を探るため昨2回融雪直後および根雪直前の5月と11月に野幌の森の全域でゴミ拾いを実践しようという提案です。

## 2. 「野幌の森ありがとう観察会」

### 実施要領（私案）

**趣旨** 野幌の森の樹木・野草などの森林生の生物を観察するとともに私たちが残したゴミ等を片付け、森林生態系への私たち人間の影響を考え、野幌の森との共存を考える。

**主催** NGO NPOである北海道ボランティア・レンジャー協議会

**対象** この趣旨に賛同する一般市民、および北海道ボランティア・レンジャー協議会会員

**場所** 野幌森林公園

(参加者数により各コースを設定)

**日時** 平成11年5月9日(日)および

11月14日(日) 10:00~15:00

**ふりかえり** 大沢口には14:30に全コースの参加者が集合し問題点を集約し、これからの活動の資料とする。

### 予定コース

<b>Aコース</b> (5.8km)	大沢口 → 大沢口 → エソズリハコース → 四季美コース
	↑
	カツラコース ← ← ← 大沢園地(昼食)

<b>Bコース</b> (5.8km)	大沢口 → 大沢荒地 → → → ホロベツの沢
	↑
	↑
	↑
	瑞穂連絡線 ← 瑞穂の池(昼食)
	↓
	開拓の沢 ← ← 百年記念塔
	↓

<b>Cコース(参考)</b> (10.5km)	大沢口 → → 中央線 → → エソマツコース
	↑
	↑
	↑
	モミジコース ← カラマツコース ← 登瀛別園地(昼食)
	↓

### おわりに

この行動は私たちの身近な森でのささやかなものであり、自然保護などと高い視点から野幌の森を見下ろすものではありません。身近な森からの受けている恩恵に対するささやかな返礼にすぎません。

この活動が皆さんの賛同を得て、動き出したとき野幌の森と200万人市民とが共存するというすばらしい事例になると思われるのです。

# 観察会研修会 情報

## 1月以降のボランティア・レンジャー協議会主催の自然観察会

◎「野幌の冬の森」自然観察会 野幌森林公園

平成11年2月28日(日) 10:00~12:00 下見 2月21日(日)

集合場所 野幌森林公園内北海道開拓記念館前

## 1月以降のボランティア・レンジャー協議会が協力する自然観察会

(野幌森林公園事務所主催)

◎「3月の森の観察会」平成11年3月28日(日) 9:30~14:00 下見 3月22日

集合場所 野幌森林公園大沢口 (28日・22日共に昼食をご用意ください)

## 公園事務所・開拓記念館共催の観察会

◎「冬の森を歩く」観察会 平成11年2月14日(日) 10:00~15:00

森の中にスキーで入り、雪上の足跡などの痕跡から動物の生活を探ります。

## 開拓記念館主催の観察会

◎「親子で見る森の自然－冬芽のころ－」観察会

平成11年2月28日(日) 10:00~15:00

(問い合わせ先 公園事務所 011-898-0455 開拓記念館 011-898-0456、011-898-2525)



## ◎◎◎◎◎ 編 集 後 記 ◎◎◎◎◎

◆1999年が明けました。会員の皆様には穏やかな新春をお迎えしたと存じますし、一年の活動に思いをめぐらしていることでしょう。自然をしっかりと見る目を養い、自然を慈しむ心を持って、この一年活動していきたいものです。

◆ここ10年来、暖冬傾向にあったと言われる本道の冬の気候も、偏西風の振幅の変化によって、大雪が発生したり、気温が低温傾向に推移するとの予報がだされています。そんな中で、冬の自然とのつき合い方や楽しみ方の工夫を考えていきたいものです。

◆冬の自然のつき合い方・楽しみ方は、各地によってさまざまでしょう。その情報をお互いに交換しあいましょう。広報「エゾマツ」は、そんな情報交換の仲立ちをしていきたいと考えています。

北海道ボランティア・レンジャー協議会  
会報誌「エゾマツ」47号 1999.1.15 発行  
発行責任者 大友 健  
(表紙絵 広報部 三崎 篤)

